地域実践領域

クリエイティブ・スタディーズコース

CREATIVE COMMUNITY DEPARTMENT

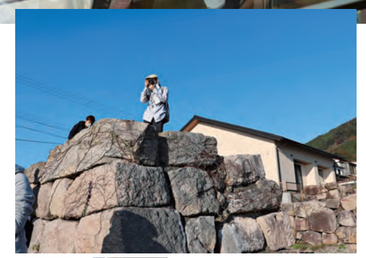
CREATIVE STUDIES COURSE

地域という教室で
「考える」
「動く」
「創造する」

地域のキーパーソンとして
創造的提案ができる人材を育成します。

人口減少社会を控え、未来の持続可能な日本社会を考えるとき、地域の活性化が大切な要素として浮かび上がってきます。地域に根ざす成安造形大学は、アーティストやデザイナーを輩出するのみならず、「地域」からの視点で芸術を捉え直し、質の高い働き手の供給により、地域全体のクリエイティビティ(創造力)の向上に寄与すべきであると考えます。

2018年4月からスタートした地域実践領域クリエイティブ・スタディーズコースでは、これまで本学が培ってきた近江学研究や地域連携事業をベースとしながら、芸術教育の特質を活かして、より具体的な方法で学生が地域に入り込み、現場で活躍する人が教員となって学生を育むシステムを構築。地域経済、環境、観光、歴史文化 、伝統文化、食、各種素材、商品開発、農林水産業、福祉 、まちづくり、地域行政など、横断的な学びのフィールドが広がっています。自分の仕事や人生について能動的に考え、自己の資質を向上させ、社会的・職業的な自立を目指すために必要な能力を育成します。



滋賀県の環境と特質を活かした地域実践領域のアクティブラーニング

この領域は、地域というフィールドを最大限に活かし、楽しみながらアクティブに活動することが基本です。PBL(プロジェクト等に基づく実践学習)を通し、デザインや美術を専攻する他の領域の学生たちと交わることによって、クリエイティブな感性や発想力を獲得。同時に滋賀県内で活躍する招聘教員や、キャリアサポート担当教員との関わりの中で、長期にわたる就業実践を体験します。

1.創造的感性(クリエイティビティ)の構築

造形やデザインを志す学生と同じ環境で学ぶことで、面白いことや新鮮なこと、不思議なこと、思いもよらなかったことに気付き、独自の感性が育まれていきます。実社会の現場で様々な「コト、モノ」と出会い、敏感に反応し、判断できる感覚を身につけます。

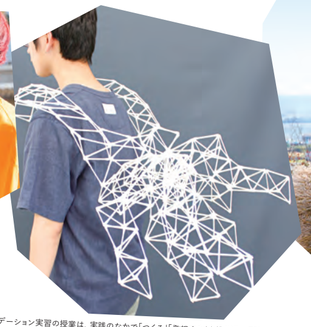
2.独自のインターンシップ

地域実践領域では地域の様々な企業と連携し独自のインターンシップに取り組んでいます。地域の魅力や独自性を活かした仕事、高齢化社会を想定した思考、持続可能な社会とは何かなど、大学と企業がこれから訪れる社会を予測し、未来社会を指標においた実践授業を計画しています。

3.地域実践フィールドワーク

フィールドに出て現場でしか味わえないリアリティーを体験。足を運ぶ地域のことを事前に調べて課題を予測し、イメージを膨らませることで、地域が抱える問題を的確に捉えることができます。得た情報は資料や文献と照らし合わせ、問題点や本質にアプローチしていきます。

成安造形大学で開催した、野菜や地酒、雑貨などのつくり手と会話を楽しみながら思いをシェアするマルシェ「マルシェア薫」。



ファウンデーション実習の授業は、実践のなかで「つくる」「発想する」を繰り返し経験。考え、動くことで手に入れた新しい発見を通して視野を広げていきます。

近江八幡市の伝統の祭礼に登場するヨシ松明を制作するワークショップ。千年の歴史をつなぐ祭礼の意味を理解したうえで神に捧げる松明を制作しました。

医療機器などを開発する島津製作所のプレゼンテーションに参加。「診断用X線撮影装置」の装飾用イラストシールのデザインを提案しました。

人々が集い自然とつながる場として誕生した、たねやグループ「ラ コリーナ近江八幡」を見学。普段は入れない場所も見学できました。

高島市針江にてフィールドワークの授業。水とともにある暮らし、生業、信仰などに着目し、自らの視点や気づきからプレゼンテーションを行います。

大津市仰木地区の60~90歳代の方々に生活文化の聞き取り調査をし、今は見ることのできない情景を「仰木ふるさとカルタ」にして再現したプロジェクト。

これからのビジネスのあり方を提案するゲストスピーカーと一緒に、未来に繋がる新しいビジネスプランを考えました。

水口自治振興会が甲賀市と共同で取り組む「みなくち盛り上げ事業」に参加しました。

地域実践領域の4年間の学びの流れ

フィールドワークと並行しながら、地域実践に関連する複合的な講義や演習科目で知識と技術を高め、創造できる人材を育むプログラム。就職活動に役立つキャリア育成も万全です。

授業項目	1年次	2年次	3年次	4年次 前期	4年次 後期
講義系授業 地域・社会を理解する授業。身近な地域社会をモデルに、社会の仕組みや全体像へと理解を深めます。	**地域観察** 地域の地理、地誌、歴史文化の背景を学びます。地域の特性や社会環境を理解し、未来社会の暮らしのあり方について探求することで、地域実践を学ぶ意義を掴みます。	**地域分析** 地域の観察からそこにある問題を発見し、それをトータルに理解する方法を学びます。地域社会の現状やこれまでの推移を分析し、その特徴・課題を正確に認識するための手法を身につけます。	**地域活動** 自然災害や高齢化社会に直面し、安心して暮らせる新しい社会のあり方が問われています。滋賀県で新たな価値観を創造する企業家や研究者を招聘教員に迎え、実践感覚に触れながら、創造する過程を学びます。	**地域創造** 社会は様々な「コト」や「モノ」が関係しあって成立しています。領域を横断しながら情報を多角的・多面的に精査し、構造的に捉える能力を養います。	**卒業研究 1** 地域・社会を理解する授業とクリエイティビティ（創造力）を養う授業から組み立てられた自身のテーマを構築し、研究内容を決定していきます。 **卒業研究 2** 構築された自身のテーマに対してより良いアウトプット方法(論文、活動報告書、体験のまとめ、作品など)を考え、表現します。
演習系授業 クリエイティビティ(創造力)を養う授業。新しい「コト」や「モノ」を生みだす力を、実践のなかで磨いていきます。	**コンピュータスキル（制作）** 自身の考えや思いを文章化するとき、データや統計を図やグラフ化するときに必要な基礎的なコンピュータスキルを習得します。プレゼンテーションの資料作成時に役立つ素材の探し方・選び方、簡単な写真編集の方法も学びます。	**プレゼンテーション（発表・発信）** 自分で考えた企画を誰かに伝えるとき、聞く相手、人数、場所によって、伝え方を変える必要があります。プレゼンシーンやテーマを変えながら繰り返し行うことで、アイデアや考えを聞く人に分かりやすく発表できるようになります。	**ファシリテーション（促進・支援）** 自分が中心となって地域の人や仲間を巻き込みながらプロジェクトを進めていくとき、自分の考えやアイデアへの理解を求めます。合意形成や相互理解をサポートし、協働を促進させる、キーパーソンに必要な素養を身につけます。	**企画・編集（創造）** 様々な関わりや関係が構築されると、プロジェクトを構造的に捉え直し、理解しやすくまとめることが必要です。または一つのストーリーに編集することが求められます。4 年間の集大成として「コト」「モノ」をつくりあげるスキルが身につきます。	

プロジェクト系授業

現場での経験値を増やし、多くの学びを得る授業。フィールドへ飛び出し、地域ならではの体験を通して学びます。

歴史・地域、デザイン、文化・芸術 、教育・福祉 、プロデュースをテーマに地域と連携しながら他の領域の学生と協働してプロジェクトを展開。現場で出会った「コト」「モノ」と向き合い、最終的には参加するプロジェクトの企画・立案を遂行。自らの表現が社会と対峙できているかを追求します。

［プロジェクトの進め方］

問題発見と探求 → 体験と対話 → 工夫と展開 → 社会・地域と連携

キャリア系授業

地域実践から生まれるキャリア育成授業。働くことの意義を理解し、自らの価値観のなかでより良く生きることを学びます。

社会人として求められる基本的なスキルを身につけます。地域での体験や学びを通して、実社会に対して自分が果たす役割が何なのかを探求します。（※本学キャリアサポートセンター長が一人ひとりのキャリア実現を後押しします。）

［キャリア育成のステップ］

- **客観性と主体性**：自分のポジショニング、自分のキャラクター
→ **社会で求められる力**：社会人基礎力、ジェネリックスキル
→ **インターンシップ**：報告・連絡・相談、タスク管理
→ **アイデンティティーの確立**：自己実現、自立(自律)、自信

身につく地域実践の力

探す力
フィールドでの授業を通して様々な「コト」「モノ」に興味関心を持つことをきっかけに、気づき、課題発見、違いの見極め、自己探求、広げる感覚などを繰り返し経験し、探す力が身につきます。

聞く力
現状や事実の理解を深めるには、他者を認めて意見を聞く力が必要です。相手を知る、フォロワーシップ、共有、共感、協働、相手を敬うとは何かを、実践を通して学びます。

話す力
プレゼンテーションに関連する授業は、論点をつかむことに重きを置き、考えを整理して組立て、聞き手に分かりやすく順序立てて話す力を伸ばしていきます。

動く力
フィールドでの実践に失敗はつきものです。経験を積むことで、失敗を恐れず、自ら動く力を身につけ、一歩踏み出すことの大切さを学びます。

企てる力
地域の諸問題を解決するアイデアや自身の考えを実行するために求められるのが企てる力。イメージを文章化する、異なるものを組み合わせて工夫するなど、計画を実行する一連のプロセスを経験します。

動かす力
企画を前進させるには、信頼関係を構築し、携わる人を動かす力が求められます。プロジェクトの授業を通して、連携、助け合い、任せるなどリーダーとして牽引できる素養を育みます。

まとめる力
地域の諸問題に向き合うなかで記録したことを、絵や写真、文章を組み合わせて報告書にして提出します。経験した「コト」「モノ」を構造化して表現できる、まとめる力を身につけます。

創造する力
講義で得た知識と実習で培った技術を駆使し、フィールドで生まれたアイデアを創造できるようになります。目に見えるものだけでなく、モデルケースやコミュニティ構築も創造する一つの形です。

地域実践領域スタッフのひとこと

「大学と企業が一緒につくる共創型インターンシップ」

長期にわたる企業との共創型インターンシップ

地域実践領域では、地域の様々な企業と連携し、3年次に独自のインターンシップに取り組みます。
このインターンシップは、1年間に約4ヶ月間という長期間にわたって、実際の現場で仕事をします。
地域の魅力や独自性を活かした仕事、高齢社会を想定した仕事、持続可能な社会における仕事など、
未来社会を指標においたイノベーション事業を企業とともに取り組む実践型授業です。

ここが違う！地域実践インターンシップ

他大学にもある従来型の一般的なインターンシップ

- 4日間から1週間程度の短期間
- 就業意識のアップや、社会生活を身近に体験
- 短時間で可能な就業体験

地域実践インターンシップ

- 1年次から4年次まで自分らしい仕事のあり方を追求できる
- 約4ヶ月間にわたる長期インターン
- 長期間だからこそできるイノベーション事業に携われる

ゆっくり深める
様々な仕事を経験しながら仕事の本質をつかみます。

じっくり関わる
様々な人たちと関係性をつくり共創する喜びをつかみます。

しっかり働く
様々な経験や関係性が自信となり自分の仕事をつかみます。

専門科目として行われるインターンシップの流れ

1年　2年　3年　4年

4月　5月　6月　7月　8月　9月　10月　11月　12月　1月

- 準備・マッチング　地域実践学・演習
- 事前指導　地域実践演習5
- インターン前期　地域実践演習6
- インターン後期　地域実践演習7
- 事後指導　地域実践演習8
- 発展・研究　卒業研究

インターン期間の1週間の流れ

月	火	水	木	金	土	日
	面談日			インターン	インターン	
学内通常授業	学内	学内通常授業	学内通常授業	学外	学外	休み

週1回は教員と面談。独自に開発された実習ノートのチェックなど

実際に週2日間程度学外に出て企業で実習

インターン・実習の現場（施設）

インターン・実習の現場として、株式会社たねや、オプテックス株式会社、有限会社ブルーベリーフィールズ紀伊國屋、琵琶湖汽船株式会社、総本山三井寺、彦根仏壇「株式会社井上」、冨田酒造有限会社、「わさいな仰木」仰木地区活性化委員会、株式会社まちづくり大津、まちづくり会社まっせ、針江のんきぃふぁーむなど招聘教員が所属する企業や団体等を想定しています。

写真撮影協力：「たねやグループ ラ コリーナ近江八幡」

学びとつながる
近江特産品トリビア《暮らし編》

近江に古くから伝わる身近な「コト」「モノ」に目を向けると、豊かな暮らしのあり方が見えてきます。

淡水真珠

1980年代に最盛期を迎えた琵琶湖の淡水真珠養殖は、数人の志高い養殖業者と淡水真珠を販売する「神保真珠商店」の店主によって受け継がれてきました。淡水真珠は、自然がつくり出す一つとない色や形が魅力です。本学教員が関わり2015年からスタートしたブランディング事業では、貝殻を活用し、貝ボタンやアクセサリー、クラフトへと展開しています。

和ろうそく

高島市にある1914年創業の和ろうそく製造販売の老舗「大與（だいよ）」は、仏事はもちろん、茶事など暮らしの中で使える和ろうそくを提案しています。附属近江学研究所の講演会では、「大與」の3代目大西明弘氏、4代目巧氏をお迎えし、次の百年を展望した、暮らしをデザインする和ろうそくの可能性や取り組みを語っていただきました。

桶・指物

木工芸で人間国宝に指定された父をもつ桶職人の中川周士氏（中川木工芸比良工房）。中川氏は伝統の桶の技とクールなデザインを融合させ、従来の常識をやぶる、楕円型とシャープな口縁の桶をつくり注目を集めています。附属近江学研究所の講演会では、桶が伝える伝統のものづくりから学ぶ、新しい暮らしのあり方や、新たな使用方法などをお話しいただきました。

彦根仏壇

仏壇をつくる技術は武具をつくる技術から発展したと言われています。彦根仏壇も、武具師、細工師、漆工の技術が活かされており、江戸時代から続くこの生業は、彦根藩に擁護されていた平和産業として今日も受け継がれています。本学招聘教員の井上昌一氏（株式会社井上）がその技術力の高さを活用し、様々なクラフトの開発やブランディングに携わっています。

琵琶湖の花火

打ち上げ花火の原点は、神に捧げるためという意味が込められています。戦国時代に発展した火薬の技術は、平穏な時代に夜空を焦がす美しい花火へと姿を変えました。大津の瀬田唐橋では、建部大社の祭礼として、今もなお神に捧げる打ち上げ花火が夏の風物詩となっています。※附属近江学研究所の公開講座では、花火の伝統を支える花火師を通して、花火の歴史を学びました。

※附属近江学研究所：成安造形大学内にある研究機関。 近江の歴史と芸術の持つ創造精神とを結びつけ、新たな可能性を探求しています。

インターンシップレポート

3年次の演習系授業では、長期インターンシップを経験します。一社会人として就労体験を行い、実際に行われている仕事内容や業界について知ることができる就職活動への第一歩！
ここでは長期インターンシップ先の地域のキーパーソンとインターン生の声を集めてみました。

針江のんきぃふぁーむ

環境社会と現代農業

農閑期の仕事を実体験しました。

三輪泰生
（地域実践領域３年）

のんきぃふぁーむへ行く以前から有機野菜を栽培する農家さんと知り合い、農業の経験を積んできました。また農作物の品種や農薬、肥料の関係、その仕組みにも興味を持っていました。現場での仕事は想像以上に過酷で、常に体と頭を使うことばかりです。石津さんと関係ある方々と出会い、講義や討論を聞くことで、一次産業の大切さを改めて実感しています。今、僕たちが安定的にご飯を食べられていることに疑問を抱くことはほとんどありません。しかし高齢化による耕作放棄地の増加など、今後様々な問題が押し寄せてくる未来はそこまできています。リアルな現場で体を動かし、自身の意見を持って、自身の立ち位置を獲得していきたいと望んでいます。

普段は現場で農閑期の仕事をやってもらいながら、農業を取り巻く多くの人と関われるよう努めています。これからの農業は様々な職種（人々）と関わり、クリエィティブ（創造的）であるべきだと考えているからです。三輪くんが現代の農業とそれを取り巻く社会に関心があることが興味深いです。彼が将来農業を仕事にするかは分かりませんが、可能性と選択肢はまだまだあります。この経験を活かして、自分の立ち位置を見つけ出し、生きるテーマを見い出してほしいです。

地域のキーパーソン
針江のんきぃふぁーむ
石津大輔さん
（招聘教員）

天台寺門宗総本山 三井寺

観光と信仰とまちづくり

船川亮平
（地域実践領域３年）

三井寺での2ヶ月間は、本当にお世話になりました。まず、前半の坐禅や写経、山伏体験、数珠づくりなど種々の体験の中で、三井寺というお寺では様々な人々の思いに応えた祈祷を行うという宗教的な役割と、広く多くの人々に来てもらい、日本文化や文化財の大切さなどを知ってもらうという観光的施設という役割があることを知りました。そして、これからの地域におけるお寺という宗教施設のあり方や、無くしてはいけない大切なものをどう残していくのか考えさせられました。また、三井寺で活動される様々な人たちとの出会いの中で、人のつながりや信頼の大切さを学び、この経験を出身地の地域貢献にも活かすことができればと思いました。

観光的施設としての側面から参詣者を受け入れる受付業務をはじめ、文化財公開行事の見学や坐禅、山伏の体験など、参加できる体験型プログラムを実施。さらに観光客にアンケートを行い、各自がテーマを設定し解決案を考えることを課題にしました。どこまでインターン生の視野が広がったのか懸念していましたが、最終日に「長い間お世話になったので、さびしい気持ちです」との言葉に救われる思いがしました。今後も貢献できるよう積極的に受け入れていければと考えています。

地域のキーパーソン
天台寺門宗総本山 三井寺
福家俊彦さん
（招聘教員）

三井寺境内にある、今は使用されていない古い建築物のリノベーションを検討するためにそのアイディアを探る船川さん。

琵琶湖汽船

エコツーリズムで限界集落を守る

高島市椋川集落の活性化の拠点となる古民家。
ここから何ができるかを考える栗田さん。

栗田くんからは、自立して今後を生きていくための視座を自分自身の中に創りたいという思いを感じました。議論と検討を重ね、フィールドワークを交えてコミュニケーションの充実を図ることでたどり着いたのは、「住みたい所で生きたい」という方向性です。今回のインターンシップは栗田くんの故郷「椋川」で、「成熟社会を引き継ぐ」ではなく「成熟社会を自分の手で創る」という考え方で実践していく事となりました。

地域のキーパーソン
琵琶湖汽船株式会社
川戸良幸さん
（招聘教員）

栗田明典
（地域実践領域３年）

私は、祖父が住む高島市の山間部にある椋川（むくがわ）という地域に残る原風景を後世にも伝えるため、エコツーリズムを椋川地域に取り入れることで、移住者などが増え、地域の活性化につながるのではないかと思っていました。しかし、川戸さんと色々とお話をする中で、自分ができることは何か、現在のコロナ禍においてツーリズムでできることは何なのか、を考えたときにその難しさを知りました。特に一過性の取り組みでは持続性がなく、本当に椋川の現状を知りその環境を守っていこうと本心で思う人を取り込んでいかなければと考えるようになりました。

講義系授業

仰木地域の人々を前に、地域活性化の拠点について未来のアイデアを発表する学生。

仰木地域の郷土料理「納豆もち」。

地域の文化遺産としての民画「大津絵」についての特別授業の様子。

講義系 1年

地域観察

現代社会の諸問題や地域社会のあり方を能動的に学ぶ

1年生の講義科目は、はじめに自分と社会がどのようにつながっているのかということを理解し、そのうえで人口減少や高齢化社会、環境問題、経済優先社会の弊害などの現代社会の諸問題を考えます。そして、国連が掲げる持続可能な開発目標（SDGs）について学び、自らも2030年の理想の自分を想像します。後期には、地域を観察するというテーマで質的アプローチとして民俗学を学び、地域に残る俗信やハレとケ、食文化などに触れ、地域社会の未来を予測します。授業は、一方的な講義だけでなく、グループワークやディスカッション、フィールドワークも含め能動的な学びが実践されています。

講義系 2年

地域分析

システム思考を身につける

講義では、地域に存在する様々なデータ（数値）に着目し、市町村レベルの特定の地域を、データと社会の関係性を含め広い視野でとらえることを学びます。特定の地域の人口、性別、年齢層、各種産業の就業割合などからその地域の特徴を他と比較。客観的なデータをもとに地域を分析すると、他者に説得力を持って説明することができるからです。その上で、地域産業や活動する人々のつながり、そして関係性を学びます。例えば、山間地域の人口減少や高齢化という課題を解決するために、林業など一つの産業の活性化のみの対応では不十分です。交通インフラの整備や、農業との連動、新商品の開発、販売など他の産業とのつながりも含めて総合的に検討する必要があります。

「風が吹けば桶屋が儲かる」という諺から、様々な連関を想像する演習。

市町村における高齢者率を調査。

Web上のデータを収集、整理し、グラフを制作します。

地域の交通インフラや産業など地域のつながりを表現するシステム図についての解説。

そして学んだ理論をもとに特定の地域を想定し、データをもとにして実際に分析します。そのために、WEB上のどこから客観的なデータ（数値）を取り出すのか、取り出したデータをどのように適切なグラフに置き換えて見える化するのかを学びます。また、社会の関係性については、例えば「風が吹けば桶屋（おけや）が儲かる」という「ことわざ」をもとに、風が吹くことで巻き起こる様々な事象から、最終的に桶屋が儲かるという連関図を、ディスカッションしながら図化するトレーニングを行います。最終課題では、特定の地域が幸せになるような提案を、データと関係図を使って他者にわかりやすく説得力を持って解説（発表）します。

講義系 3年

限界集落と言われる地域の活性化のアイディアを発表します。

自らのライフプランをセッションで説明するための「ポスター」。

地域資源を活かし活動する招聘教授からその実践事例を聞き、自らの活性化のアイディアにつなげます。

地域活動

地域の課題解決案やこれからの暮らしのあり方を提案する

地域実践領域の招聘教員や滋賀県経済同友会大津支部などの社会人を講師に招き、社会で生きていく上での難しさや楽しさを、臨場感を持って語っていただきます。前期の授業（地域実践学3）では滋賀県（地域）の課題を解決するため、県内で開催されるアイディアコンテストに提案することを目的に内容をまとめ発表します。後期の授業（地域実践学4）は、人生100年時代の生き方や人生プランを研究することを目的とし、これからの社会における人の生き方を自分の将来に重ねながら検討。発表はポスターセッション※で行います。

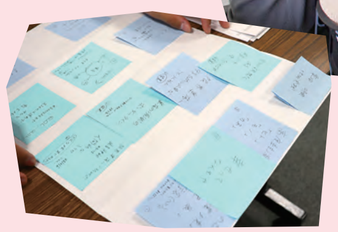
※伝えたいことを一枚のポスターにまとめ、それを踏まえて発表を行う手法。

キャリア系授業

キャリア講義の「目的」就職はゴールではない

大学で学んだ知識や経験を、自らが希望する進路先でどのように生かせるのか?そのことを深く考え、少しずつ明確にしていくことで自己肯定感の向上を目指しています。具体的には、1年生のキャリア講義「大学での学びの目標づくり」から始まり、2年生からは他領域のメンバーと一緒に、グループワーク形式で様々な問題解決に取り組みます。グループワークでは地域の事業者をはじめ、様々な世代の講義サポーターと交流するので、広い視野や世代を超えたコミュニケーション力が自然と身に着きます。

さまざまな企業人と共にグループワークを実施。



Student's Column 1
僕と私と地域
お土産開発の話

徳永麻衣佳（地域実践領域1年）

地域にはまだまだ知らない魅力が隠れている

私は大学の近くの滋賀県大津市出身です。4年前、成安に地域実践領域ができるのを知って、自分が行きたい領域ができるのがうれしかったのを覚えています。将来は地元を盛り上げられるような仕事に就きたいと思っているので、他の大学のまちづくりが学べる学部よりも、地域実践領域は滋賀県に根ざした印象があり受験しました。

授業はフィールドに出て地元を歩くこともありますが、授業で歩いているといつもの景色が違って見えるから面白いです。「こんな知らないことがあったんだ!」と驚くことがたびたびあります。お土産を開発する課題でも、同じような出来事がありました。

コロナで需要が高まっているというところで、地元の素材を使ったマスクケースをつくることに決めた私は、最初に布を探しました。そこで出会ったのが高島ちりめんです。しかし、高級すぎてコスト的に断念する結果に。切り替えて次に探したのが紙です。何度もインターネットで検索をして見つけたのがヨシ紙でした。琵琶湖のほとりに自生するヨシを使った紙があるのは知らなかったので、お店へ電話をかけてから早速草津へ。せっかくなら全部滋賀らしいもので制作したくなり、紙をとめるテープも信楽焼や琵琶湖など滋賀の特産品や自然が描かれたマスキングテープを採用。ハンドメイド感もありながら、滋賀がギュっとつまったマスクケースをつくることができました。素材を探すのに一番時間がかかりましたが、滋賀県ならではのものと出会うことができ、滋賀県の魅力を再発見することができました。

丈夫で環境にもいいヨシ紙のマスクケース。
マスキングテープのかわいいイラストがアクセントに!

Student's Column 2
僕と私と地域
地域と未来社会の話

左｜ライ ウテン（地域実践領域1年）
右｜チョウ キントウ（地域実践領域1年）

未来がどんな社会でも勉強することで解決策が見つかる

ライ：僕は中国の浙江省出身でチョウさんは四川省出身です。東京の画塾で知り合い、一緒に地域実践領域を受験しました。日本で絵の勉強をして、将来はゲーム会社でイラストを描くのが夢だったのですが、チョウさんに地域実践領域の広報誌を見せてもらい、僕も受験したいと思うようになりました。

チョウ：私の地元は遺跡がたくさん残っている街で、小さい頃から民俗学や神話を聞き、友だちと対話をしながら育ってきました。日本の神話や妖怪にも興味があり、民俗学や神話と関わりが深い地域のことを学べる地域実践領域を選択。「2030年の社会を予見し、その中で生きる自分の姿を描く」という課題では、神話と人間の生活の関係を研究する仕事に就きたいと発表しました。神話を通して地域の背景を学び、人々に地域の文化的価値を伝えていくことで、自然や景観が人の手によって守られていく可能性があると考えています。

ライ：僕は将来、地域の人と海外から日本へ働きに来ている人の架け橋になるような仕事ができたらと思っています。世の中が変わるスピードはどんどん加速しています。2020年にコロナで社会が大きく変化したように、来年、再来年はどのようなことが起こるかわかりません。今は明るい未来を描きづらいタイミングではありますが、どんな状況でも勉強することで解決策が見つかると信じています。未来がどんな社会になっていても応用できる力を、地域実践領域で培っているところです。

チョウさんが授業で発表している様子。寺院の建築様式について、日本と中国の違いに注目しました。

演習系授業

1｜探 求

フィールドワークの舞台は滋賀県の特徴ある地域です。滋賀県（近江）は江戸時代、主要な街道が通っていることから宿場町が栄えました。変わりゆく今日の町並みと受け継がれる歴史文化を比較しながら新たな発見へと想像を膨らませていきます。また、水辺の暮らしを探索し、自然環境の在り様に目を向け、人と自然の関わりに少しずつ気付いていきます。

「仰木」フィールドワークの様子。

「水辺と暮らし」フィールドワークの様子。

「街道と宿場町」フィールドワークの様子。

演習系
1年

地域への興味関心から新たな気づきを提案します

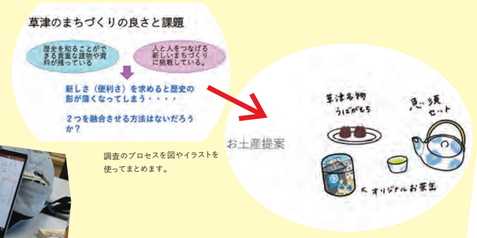
地域の魅力をプレゼンテーションします。

2｜表 現

地域のお土産を開発する授業では、現場で出会った人に調査したことや収集した資料、写真を編集して発表しました。地域の特徴を活かすためには、予測を立てることや、違うモノ、コトを組み合わせて考えるなど、工夫やチャレンジが必要です。誰かと相談しながら自分の考えを整理し、新しい視点で地域に光を当てていきます。

茶葉店にて聞き取り調査をしました。

お土産のデザインに思考を組み込む。



調査のプロセスを図やイラストを使ってまとめます。

3｜振 返 り

発表後は、今すぐ取り組める修正やリベンジプレゼンも試みています。それは自身が調べたことや経験したことについて、計画的に発表、表現できたか、テーマが構築できたかなど、できていない部分を自覚するためです。自身の新しい発見から可能性や手応えを獲得していくことも大事ですが、理解できていないことを把握することも大切です。

文献やWebサイトを活用しての調査、確認。

話す、書くことで考え方を整理する。

いろんな方向から考えるという行為が大切。

これから社会に出て行く若者には、じっくりモノを考えて欲しいと思います。既成の事柄を鵜呑みにするのではなく、多角的にモノを見て、考える癖をつけて欲しいのです。答えが出てくるかは別として、いろんな方向から考えるという行為が大切だと思います。

── 地域とつながるキーパーソンの声 ──

八杉 淳さん（草津市立草津宿街道交流館 館長）

近世の街道と地域文化史研究の第一人者。江戸時代の地方都市に生まれた知恵を今の時代に伝えるため、古き良き時代の伝播者として多方面で活躍。

Student's Column 3
僕と私と地域
フィールドワークの話

加納千里（地域実践領域1年）

フィールドワークは多様なものの見方を育んでくれる

僕は滋賀県蒲生郡日野町の出身です。高校生の頃は交通の便が悪く、人口が少ない地元のことが嫌いで、こんな田舎いつでも飛び出してやりたいと思っていました。しかし、地域のことや社会問題に興味があり、地元が嫌いだからこそまずはもっと深く地域のことを知ることが大事だと、地域実践領域へ進学しました。

フィールドワークでは滋賀県の様々な地域へ足を運びます。はじめて訪れる街へ行く度に、その角を曲がったらどんな景色が見られるのだろうとワクワクするんです。事前に市町村の観光情報サイトや歴史の本で調べた情報をもとに、グループで客観的な視点をもちながら、個人の感情も大切にして現地へ赴くのですが、毎回行かないとわからない地域の本質に出会います。

印象に残っているのは、大学の近くの仰木地区です。大津は京都と大阪のベッドタウンというイメージですが、仰木には農業で生活している人がいたり、祭礼行事が今も受け継がれているなど、昔ながらの自然や暮らしが残っているところに惹かれました。地域の人に話を聞くと、観光情報サイトや文献では知ることができない、その場所を愛している人たちの思いが伝わってきます。僕はフィールドワークを通して、自分の生まれた街や住んでいる地域に愛着を持てることは幸福なことだと感じました。今は地元の交通の便が悪いところを、都会から離れているからこそ地域ならではの共同体が育まれるという視点で捉えられるようになりました。将来は、地元を好きな街に変えていけるような仕事がしたいと思っています。

グループでフィールドへ行くと、お互いに気付きがあり、新しい視点が広がっていきます。

1｜体験と創造

「地域の素材でつくる。」では素材に触れる、感じるなどといった体験から始まります。それはモノやコト以外に様々な可能性が考えられるからです。例えば琵琶湖とその流域に漂着しているたくさんの流木がどこから来てどこへ行くのか?流木が形を変えてオブジェや空間演出に様変わりすることで、様々な人の目に映り、手に触れ、関係が生まれるという新たな価値を産み出すかもしれません。

体感することでリアリティーを獲得していく。

ダム湖の岸に漂着する流木。

現場に立ち入り間伐材の利用方法を学びます。

演習系
2年

現地で収集したものを分類してみる。

地域の素材でつくる サステナブルデザイン

2｜工夫と挑戦

素材を扱うにはその特性を知ることが大切です。自身が思い浮かべた形やイメージに近づけるには技術と環境設定が重要ですが、全てが揃っているとは限りません。今の自分にできることや友だちと協力して取り組めることから始まります。それはセオリーやロジック（論理や道筋）に頼るだけでは難しく、あれこれ工夫することや失敗を恐れず挑戦することが解決の糸口へ導いてくれると考えています。

プロセスや体験を作品化してみる。

制作風景。流木フレームで切り取る自然のつながり。

3｜予測と展開

「サステナブルデザイン」では持続可能な社会を目指すには何が必要か、予測することが問われています。過去から現在の経験による成功や失敗を冷静に見つめ、問題に対して必要なデータを収集する、読み解くなど新たな解釈をすることが要求されます。提案するアイデアは一部の誰かが得ることや、優位に立つことではなく、誰と関係するか、どのように展開するかが重要です。

サステナブルデザインの観点から自作を分析する。

デザイン提案した新しいパッケージ。

Student's Column 4
僕と私と地域
流木フレームの話

大杉千晶（地域実践領域3年次編入）

地域の素材を再生することで生まれる新たな視点

私は 2020 年 3 月まで地元の滋賀県高島市で小学校の教員をしていました。地域と子どもたちを結ぶ、地域連携という仕事をしていたのですが、限られた時間や空間のなかで、子どもたちと地域を結ぶ難しさを痛感したのです。そこで地域実践領域の教授や招聘教員のお話を聞き、自分自身の視野を広げることで、今後小学校へ戻ることがあれば、これまでとは違うアプローチが子どもたちにできるのではないかと思い、大学へ入学しました。

「地域の素材でつくる」というテーマのフィールドワークでは、新たな視点で地域と向き合うことができました。彦根市の南三谷公園から琵琶湖を眺めていると、湖畔には貝殻やシーグラス、発泡スチロールなどいろんなものが落ちています。その中で目に止まったのが流木です。生命があった形を残している流木に惹かれ、再生したいという思いで流木のフレームを制作しました。流木はもともと川を流れて琵琶湖にたどり着いたもの。元来た場所を旅するイメージで地元の安曇川とフレームを撮影することに。ところが、フレームで自然を切りとる感覚で写真を撮ると、大きすぎて入りきらないんです。想定していたものとは違いましたが、流木フレームが自然の中に溶け込むような写真には、自然と人工の境目や、人工的なものもおだやかに受け入れる琵琶湖の大きさ、水の向こうの人々の暮らしを切り取ることができ、私自身が滋賀県らしさを再発見できました。流木フレームを通して、滋賀県という地域の魅力を考えるきっかけが生まれれば幸いです。

生命力を感じる選りすぐりの流木を使って、堂々としたフレームが完成しました。

プロジェクト系授業

地域実践領域と情報デザイン領域の学生が共同で開発したボードゲーム。

滋賀の未来カード制作

未来社会のデザインデザインワークをとおして学ぶ、

「SDGs／ソサエティ5.0／滋賀県基本構想」

テストプレーしている様子。

提案中のカードゲーム

滋賀県企画調整課と「滋賀の未来カード制作」に現在取り組んでいます。これは滋賀県基本構想、2030年に向けたビジョン「変わる滋賀 続く幸せ」を基本理念に、自分らしい未来を描ける生き方と持続可能な滋賀の実現を目指すものです。これをわかりやすく、面白く取り組むことができるツールとしてカードゲームを開発。タウンミーティングやファシリテーション講座に参加し内容への理解を深め、ゲーム性を高めるために様々なカード・ボードゲームの要素をヒントに進めています。滋賀の名産や歴史、人物をイメージに入れるなど工夫を凝らしながら、実験検証を繰り返し制作に取り組んでいます。

タウンミーティングのグループワークに参加。

開発したカードゲームの遊び方をレクチャーしました。

大学で開催されるマルシェで販売するジャムづくりのためにブルーベリーを摘み取る学生たち。

過去に学内で開催されたマルシェの様子。

マルシェの企画運営

共感、共有、協働できるコミュニティをつくる。

自然に恵まれた滋賀県はその素材を活かし、様々なモノづくりをする人々が暮らしています。例えばオーガニック野菜やそれらを使った加工食品など、できる限り環境に負荷をかけずにつくられたものは、身体と大地のつながりをイメージさせてくれます。本学ではこのような生業を持ったつくり手とつながるマルシェを企画運営することで、経済優先の社会価値から新たな価値を見出しています。それは共感、共有、協働できるコミュニティの一つのあり方だと考えています。

2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のためオンラインマルシェを開催。そのWEBサイトのデザイン。

新聞記者の前でオンラインマルシェの開催記者発表。

大学は「分かち合える心」を育む場所。

これまでの社会は、文明と経済がつくりあげたモノの豊かさに幸せの価値があった時代と言えるでしょう。経済力で得た富で全てを自分のものにすることは、本当に幸せでしょうか。大事なことはそれらを分け合う仲間がいること。その意味や価値を共有する心を持つことが、本当の豊かさだと思います。

―地域とつながるキーパーソンの声―

岩田康子さん
（有限会社ブルーベリーフィールズ 紀伊國屋 代表取締役）

湖西の山裾に無農薬のブルーベリー栽培を手掛けることから活動を持続している。食の安全、安心にいち早く気づき様々な取り組みを実践してきたことから多種多様な起業家に支持者がいる。

佐々木さんがデザインを手がけたオンライン・マルシェのチラシ。

Student's Column 5
僕と私と地域
オンラインマルシェの話

佐々木良緒（地域実践領域1年）

オンラインの特性を活かし地域を超えて繋がれる場所に

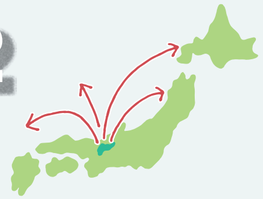
いろんな領域の学生が集まって取り組むマルシェのプロジェクト授業に参加しました。毎年学生がコンセプトを決めているのですが、今年は「繋ぐ」に決定。残念ながらコロナの影響で対面販売のマルシェはできませんでしたが、今できるカタチとしてオンラインで開催することに。コロナ禍の状況で人と人とが関わる場所が減っているからこそ、「作り手と暮らし手と学生を繋ぐ」をテーマにコンテンツを考えました。

対面販売の場合は滋賀県内のお店のみでしたが、オンラインは地域を超えて繋がれるということで声かけを全国規模に拡大。私は岡山県瀬戸内市出身で、父は農業をやりながらマルシェや市に出店しているので、実家の野菜も販売できるようにしました。他にも大阪や沖縄のお店にも参加いただき、お肉屋さん、うめぼし屋さん、野菜、アクセサリー、学生の作品など、バラエティ豊かなラインナップを実現！また、ワークショップを動画で配信する新たな試みにも挑戦し、評判も上々でした。

今回私はビジュアル広報としてポスターとチラシのデザインを担当。高校がデザイン科だったので、デザインや絵を描くスキルを活かせてうれしかったです。告知のメインであるWebは先輩が手がけられていたので、デザインの指揮は先輩にとっていただき、子どもをもつお母さんがターゲットということを意識して、やさしい色づかいやナチュラルな雰囲気を大切に制作しました。プロジェクト授業は領域や先輩後輩の垣根を越えて関わることができるので、とても刺激的で吸収できるものがたくさんあります。

伝統を受け継ぐしごと

現場での学びは、地域の伝統に触れる機会がたくさんあります。伝統工芸品のつくり手や、地産地消の生業に共感したあなたは、先人の思いを受け継ぐ担い手にふさわしい人材として、地域で活躍できるでしょう。



地域の生業を活かすしごと

地域を活性化するには、地域の情報を外へ発信していくことが必要です。例えば、伝統産業を別のモノと組み合わせてイノベーションすることで価値の転換が生まれ、販路の拡大に貢献することができます。

公務員や公共分野の職員

地域の基盤は、住民と社会の連携から生まれます。公務員、教職員、商工会議所職員、地域コーディネイターなど、知識とコミュニケーション能力を活かしながら、地域住民と社会をつなぐ役割も担えます。

地域の諸問題に取り組むしごと

地域に根ざしたNPO、まちづくり会社職員、地域おこし協力隊など、地域の現場では新しい価値観で拠点をつくれる人や、地域との連携を企てる人が求められています。

地域実践領域からつながるおしごとガイド

地域を考え、動く、創るの学びを通して成長していく4年間。
その先には、多種多様なしごとを選択できるあなたがいます。

地域の魅力を発信するしごと

独立したコミュニティデザイナーになり、例えば、特産品をブランディングしてマルシェを企画することもできます。地域の魅力発信に貢献するやりがいはひとしおです。

6 文化や芸術の企画を組み立てるしごと

芸大ならではのカリキュラムだからこそ、学芸員、アートのプランナー、コーディネイター、グラフィックデザイナーなどと連携するしごとにも就くことができます。

編集者、ライター、新聞記者

地域には魅力的な「コト」「モノ」が転がっています。その地域では当たり前でも、地域の潜在能力を物語れる人がいることで、外の社会で新しい価値として見出される可能性が生まれるのです。

医療や福祉をサポートするしごと

医療や福祉の現場は、職員不足や少子高齢化など大きな課題を抱えています。医師や看護師、薬剤師、福祉施設職員と連携しながら、現場の情報を新しい価値観で社会へ発信できる人が求められています。

営業・企画営業のしごと

考え、動く、創ることは、営業や企画営業のしごとをするうえでの軸になります。「コト」「モノ」の価値をしっかりと捉え、新しい発想で、クライアントやエンドユーザーを楽しませる人になれます。

一般企業の総合職

現場で様々な人とコミュニケーションをする経験から、社会への理解が深まります。4年間で培った多数の人とともに目標に向けて協力できる力は、信頼を持続できる人として評価され、一般企業でも活躍できます。

資格課程講座

未来の社会をより良く行き抜くためのキャリアアップのために

皆さんが未来の社会をより良く生き抜くためのキャリアアップとして有料資格課程講座を充実していく予定です。

● 有料資格講座の例●

マイクロオフィススペシャリスト（MOS）
秘書検定
販売士検定
コミュニケーション検定
日商簿記検定
色彩検定
ウェブデザイン技能検定
インテリアコーディネーター
キッチンスペシャリスト
ジュエリーコーディネーター検定
旅行業務取扱管理者
メンタルヘルスケア・マネジメント検定
ほか

予想される進路

滋賀県中小企業団体中央会との連携協定や、国内で活躍する招聘教員の協力をもとに、県内の優良な企業や各種団体と密接に連携し、滋賀県内における就職が有利となります。職種については、一般企業の総合職、営業、企画営業、地域密着型企業、伝統工芸、農林水産、まちづくり、地域振興担当者、公務員などの多彩な職種が挙げられます。

●小売・卸売り・商社・サービスなど●
鮎家、エイブル、エルアイシー、大橋珍味堂、菓匠禄兵衛、叶匠壽庵、キステム、京阪電気鉄道、久大家具、黒壁、嵯峨野観光鉄道、ジェイアール京都伊勢丹、新木産業、セブンーイレブン・ジャパン、SOU·SOU、龍鰈、カタラ食品、たねや、西日本旅客鉄道、西堀、仁々木、パロー、日野ゴルフ倶楽部、比良山荘、平和堂、楽市楽座、楽天、良品計画、ロイヤルホームセンター　ほか

●自治体・各種団体など●
大津市歴史博物館、草津市コミュニティ事業団、滋賀学園、滋賀県庁、滋賀県文化振興事業団、松風学園、高島市役所、長浜赤十字病院、長浜まちづくり、比叡山延暦寺、東近江敬愛病院　ほか

●広告・印刷など●
アインズ、ウェーブ、永昌堂印刷、エースデザイン、カプコン、京都アニメーション、ジイケイ京都、島津アドコム、東映アニメーション、トーセ、任天堂、ビイサイドプランニング、ビーエーワークス、文教スタデオ、宮川印刷、ユーストン、リビングアンドヘルス、レベルファイブ　ほか

●製造・建築・ディスプレイなど●
上西産業、エンゼルプレイングカード、小川良、オプテックス、滋賀設備、新江州、島津製作所、太陽精機、タキイ種苗、TMネットワーク、夏原工業、日光精器、フジテック、本庄、村田機械　ほか

※上記の主な就職先は成安造形大学の実績です。

学びとつながる

近江特産品トリビア《手しごと編》

近江に伝わる手しごとの「へぇ～」には、地域理解を深める学びのヒントがいっぱい！

木地盆（きじぼん）

東近江市小椋谷では、平安時代にこの地に落ち延びた京の都の皇子が、村人に手挽きロクロの技術を伝えたことから、木地盆や椀の生産が始まったといわれています。この技術が全国へと広がり、コマやコケシなどの玩具の生産が行われるようになりました。附属近江学研究所の公開講座では、小椋谷の木地師の技術と暮らしを紹介しました。

かにが坂鮎

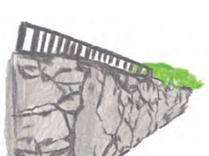
鈴鹿峠に現れる大蟹の妖怪が、比叡山の高僧に脱法を受けて「鮎になった」という伝承を持つ、蟹の甲羅を模した鮎。東海道土山宿の名物として、今も伝統の味が伝えられています。かつて峠を通る旅人は、この鮎を口に含んで厄を避けたと言われています。文化誌「近江学」第9号で、街道で語り継がれる鮎を紹介しました。

小幡人形（おばたにんぎょう）

中山道小幡で土産物として江戸時代初期からつくり始められた滋賀県唯一の土人形。「やこ」という意味は「土人形」のことを指します。十二支や、民話から飛び出した愛らしい土人形の風合いは、現代のゆるキャラの原点と言えるかもしれません。附属近江学研究所の公開講座では、350年前の土人形の型を披露しました。

大津画落雁（おおつえらくがん）

350年の伝統を持つデザインを本型に受け継ぎ、打ち出される干菓子。表面にユーモラスな大津絵が浮かび上がっています。大津絵とは江戸時代に大津の土産物として人気のあった民画で、字が読めない庶民でもわかるように仏教説話や風刺的な話しが絵になっています。附属近江学研究所の公開講座でその菓子づくりを実演しました。



穴太衆積み（あのうしゅうづみ）

比叡山延暦寺の麓、日吉大社の門前町坂本で、穴太衆という石工集団が発展させた伝統の石積み技術。その技術を受け継ぐ家訓は「石の声を聞け」です。織田信長が認めた技術は、安土城の築城に使用され、熊本城など全国の城郭に見ることができます。附属近江学研究所発刊の文化誌「近江学」第4号で紹介しています。

あなたの未来を変える!?
地域実践領域の教員

あなたの「学びたい」を育み、未来を彩る、
個性豊かな教員を紹介します。

仁連孝昭 客員教授　NIREN Takaaki

滋賀県環境審議会会長、元滋賀県立大学副学長。社会システム研究家。地域と大学、環境と経済をつなぐ仕事に携わる。エコロジー経済学、環境と調和した経済発展について研究。2000年にNPO法人エコ村ネットワーキングを設立し、理事長に就任。環境分野、産業分野でも活躍している。また、近江八幡の「小舟木」エコ村の実現などに精力を注ぐ。2016年4月より本学の客員教授となり、新しい大学教育創造に意欲を燃やしている。

《学位》
大阪市立大学経済学部卒業
京都大学大学院経済学研究科修士課程修了（経済学修士）
京都大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得満期退学

泊 博雅 教授　TOMARI Hiromasa

メディアアーティスト。1984年に設立したアーティストグループのダムタイプ（dumb type）を活動の中心として、メディアアートを研究。コラボレーションによるクリエイティブのあり方を考える。現在、成安造形大学教授、副学長。主な活動に、『S/N』（1994年「アデレード・フェスティバル」ザスペース）、『MEMORANDUM OR VOYAGE』（2014年「東京アートミーティング：新たな系譜学をもとめて― 跳躍／痕跡／身体」東京都現代美術館）他多数。

《学位》
京都市立芸術大学美術学部美術科構想設計専攻卒業（芸術学士）
京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻造形構想修了（芸術学修士）

加藤賢治 教授　KATO Kenji

宗教民俗研究者。滋賀県をフィールドとして、宗教民俗を研究。現代に受け継がれてきた地域の伝承や祭礼の意義を検証し、地域社会のあり方を考える。現在、成安造形大学准教授、同大学附属近江学研究所副所長。主な論文に『宮座の祭礼』～今堅田に伝わる祭礼「野神祭り」に見られる現状～（2012年成安造形大学附属近江学研究所紀要1号）、『寄人衆の役割に見る五箇祭』～多様なコミュニティが結び、支える祭礼の一事例～（2017年成安造形大学附属近江学研究所紀要6号）他多数。

《学位》
立命館大学産業社会学部卒業（社会学士）
佛教大学大学院文学研究科仏教文化専攻修了（文学修士）
滋賀県立大学大学院人間文化学研究科地域文化学専攻博士後期課程単位取得満期退学

石川 亮 准教授　ISHIKAWA Ryo

美術家、アートディレクター。2015年よりビワバールまるごとブランディング事業に携わる。近年は国内の神仏にゆかりのある地に出向き、その場所の持つ性質やルーツを探ることが作品制作の糸口になっている。『自然学–来るべき美学のために–』（2012年滋賀県立近代美術館）、『SHIZENGAKU』（2013年「ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ」）、『森のちから–森へ行こう–』（2014年「アーティスト・イン・レジデンス」和歌山県串本町潮岬）など、国内外での個展、グループ展多数。

《学位》
京都精華大学美術学部（現：芸術学部）造形学科卒業（芸術学士）

岩川貴志 非常勤講師　IWAKAWA Takashi

環境システム学研究者。大学在学中には、環境に配慮したまちづくりのための評価の手法、ツールづくりなどをテーマに研究。その経験を活かし、滋賀県の持続可能な社会づくりや、さまざまな自治体の温暖化対策、エネルギー政策に関する計画づくりをサポート。これからの新しい社会像を描いていく上で、地域の人たちが抱く将来への思いと、研究者たちが築き上げてきたノウハウを「つなぐ」役割が重要と考えながら活動を展開している。趣味と研究を兼ねた活動として、DIYで作れる自然エネルギーの実践にも取り組んでいる。

《学位》
京都大学工学部卒業
京都大学大学院工学研究科修士課程修了（工学修士）
京都大学大学院工学研究科博士後期課程単位取得満期退学

地域実践領域の招聘教員

滋賀県の魅力を活かして活躍する人たちから学べます。

秋村 洋
AKIMURA Hiroshi

「株式会社ブラネットリビング」代表、「株式会社まちづくり大津」役員、「文化経済フォーラム滋賀」幹事、「オーガニックレストランなぎさWARMS」店主。「ひとも社会も健康であり続けるためにー」をモットーに、生活の三大要素「衣食住」の食と建築の分野から、健康的な暮らしのスタイルや持続可能な社会づくりを提案・考察する。

石津大輔
ISHIDU Daisuke

針江のんきいふぁーむ代表。2005年より実家である高島市針江地区「針江のんきいふぁーむ」で就農。3年目から、環境への負担を軽減するために実践していたお米の無化学肥料無農薬栽培・無化学肥料減農薬栽培を徹底している。阪路開拓や講演活動などにも精力的に取り組んでいる。座右の銘は「軸足は清流に、片足は濁流に」。

井上昌一
INOUE Shoichi

「株式会社井上」代表取締役、「彦根仏壇事業協同組合」副理事長。近世以降、錺金具や、彫刻、金箔押しなど高度な七つの職（技術）によって支えられてきた仏壇づくり。彦根仏壇と呼ばれた貴重な地場産業を守るため、その技術を調度品や雑貨など、次世代に息づく新たなものづくりに活かすという挑戦に取り組んでいる。

岩田康子
IWATA Yasuko

「有限会社ブルーベリーフィールズ紀伊國屋」代表取締役。無農薬野菜を中心としたオーガニックスタイルのレストランを経営。食の安心、安全を訴える。かまどで火をおこし、お米を炊いていただくという原点にこだわり、次世代に残すべき「食」のあり方を考える。

大西 巧
ONISHI Satoshi

有限会社「大與」代表取締役。滋賀県高島市で100余年にわたり伝統の和ろうそくをつくる専門店。和ろうそく「大與」四代目主人。2011年「お米のろうそく」でグッドデザイン賞を受賞。創業100周年を機に「灯と人を繋ぐ」コンセプトブランド・hitohito（ひとひと）を立ち上げ、暮らしの中の灯と人の関係や在り方を問い、発信している。

川戸良幸
KAWATO Yoshiyuki

「琵琶湖汽船株式会社」代表取締役社長。
琵琶湖とそれを取り囲む山々という素晴らしい自然景観を持つ滋賀県をこよなく愛し、琵琶湖を舞台とした未来の観光のあり方を常に考える。母なる琵琶湖に抱かれて学ぶ学生たちとの取り組みに大きな期待をよせる。

金 再奎
KIM Jaegyu

滋賀県琵琶湖環境科学研究センター専門研究員。センターでは、地域の社会・経済・環境に関する情報や知見の総合的な解析、地域住民のニーズに基づく望ましい将来社会の姿の定量的な描出などの取り組みを重ね、持続可能な滋賀社会の構築を目指した研究を行っている。

木村道徳
KIMURA Michinori

滋賀県琵琶湖環境科学研究センター主任研究員。センターでは、持続可能な滋賀社会の実現に向けた社会実装研究の一環として、市民参加型のワークショップや地域調査などにも力を入れ、環境と調和のとれた地域社会の姿を市民と共に考えている。

上坂達雄
KOUSAKA Tatsuo

「仰木地区活性化委員会」会長。大学に隣接する比叡山延暦寺の麓、千二百余年の歴史と伝承が今も息づく仰木集落で生まれ育ち、棚田の保全や、仰木の風土・文化を後世に伝えている。現在、仰木地区活性化委員会の会長として仰木の人々をリードし続け、自然を愛し、健康を願い、夢をかなえる活動に取り組む。

小林 徹
KOBAYASHI Toru

「オプテックス株式会社」代表取締役会長兼CEO。世界初の遠赤外線式自動ドアセンサーを製品化するところから出発し、セキュリティ分野など多岐にわたる事業を国際的に展開するベンチャー企業に成長させた起業家。一方で、琵琶湖の環境や青少年の育成に関わる社会貢献活動を熱心に行う。

清水安治
SHIMIZU Yasuharu

「エーゼロ株式会社滋賀支社」支社長・執行役員、「NPO法人 結びめ」代表理事。前職は滋賀県職員。農福連携事業、障がい福祉サービス就労継続支援B型事業所「ホトラ舎」を開所し、ローカルベンチャーを進めている。その他、空き家や空き施設を利用する移住促進や地産地消の木の家づくりなど、地域活性に向けて様々な活動を行う。

左嵜謙祐
SAZAKI Kensuke

「有限会社 魚治」7代目治右衛門。高島市旧海津港近くで1748年から続く鮒寿しの老舗を受け継ぐ。鮒寿しづくりを通して得る自然との共生のあり方を日々の生業のあり様から検証し、その手法を考える。そして、歴史、風土に裏付けられた地域文化の継承と、とりまく環境と世界観から持続可能社会を問う。

冨田泰伸
TOMITA Yasunobu

「冨田酒造有限会社」専務。天文年間創業の造り酒屋15代目蔵元。他県産の山田錦に頼っていた酒米を、滋賀県産のみの酒米に切り替えたパイオニア。奥伊吹山系の伏流水と、地元篤農家の減農薬栽培米を主に使ったこだわりの名酒「七本鎗」を醸造しながら、新商品の開発を通して地域文化の発信を積極的に行う。

福家俊彦
FUKE Toshihiko

「天台寺門宗総本山 三井寺」長更。阿闍梨、大僧正。比叡山延暦寺や石山寺と並んで滋賀県を代表する古刹の一つである三井寺の執事長。三井寺は、国宝、重要文化財に指定された多くの建造物や絵画、彫刻を有する寺院としても知られ、その文化的資源を地域の活性化や、教育に活かす試みを日々続けている。

山本昌仁
YAMAMOTO Masahito

「たねやグループ」CEO。滋賀県を代表し、全国に展開する菓子舗グループの最高経営責任者。「自然から学ぶ」を常に考え、2016年近江八幡北ノ庄に「ラ コリーナ近江八幡」をオープン。菓子づくりを通じて人と自然の関係を結び、次世代につないでいくことを目的に様々な活動に取り組む。

《学びを深め、世界を広げてくれる連携研究組織》

地域実践領域 × 滋賀県琵琶湖環境科学研究センター

地域実践領域では、滋賀県琵琶湖環境科学研究センター（通称：琵環センター）と連携し授業を行なっています。当センターの金 再奎（キム・ゼギュ）研究員（本学招聘教員）、木村道徳研究員（本学招聘教員）、岩川貴志研究員（本学非常勤講師）の３名の研究員に担当いただき、学生たちは琵琶湖とその周辺地域をデータに基づいて検証することや、複雑な社会のシステムを学ぶことができるのです。そのお一人であるキムさんに琵環センターのことや研究内容についてお聞きしました。

――琵環センターはどんなことを研究されているのですか？

①琵琶湖流域生態系の保全・再生、②環境リスク低減による安全・安心の確保、③豊かさを実感できる持続可能な社会の構築、この３つの琵琶湖環境における基本的課題に対応できるよう日々研究を重ねています。継続的なモニタリングや調査で現状を把握しながら、社会・経済・環境に関する情報や知見の総合的な解析を通じて、滋賀をモデルとした持続可能な社会の構築を実現する政策提言や課題提起も行っています。

――キムさんの研究の内容は？

気候変動や人口急減・超高齢化という、地域が直面する大きな課題に対し、各地域がそれぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会創生が求められています。このような課題への試みとして、「持続可能な地域の将来ビジョンづくりの手法」と、その実現のための「進行管理の手法」について研究しています。地域に眠っている自然資本や人工資本を再活用し、地域の多様な人材に主体的に参加してもらうことで、人的資本や社会関係資本を最大限に活かせると考えています。

――地域実践領域の学生に何を教えていますか？

地域課題の発見と共有、その解決のための方策を見出すには、地域に関する多様なデータから重要な事柄を読み取り、その結果の可視化が不可欠です。そのため、地域の社会経済環境に関するデータの収集や分析手法、その結果の可視化の方法について教えています。併せて、地域の観察からそこにある問題を発見し、それをトータルに理解する方法である「システム思考法」、地域に現れるパターンを読み取り、重要な要素間の関係性を理解する方法について教えています。これらの一連のプロセスを通じて地域を理解し、望ましい地域の将来ビジョンづくりに発展させる手法の習得を目指しています。

――大学との連携の可能性は？

大学は、地域に根差した持続可能な地域づくりを進める上での貴重な資源の一つであり、重要なパートナーです。地域の課題に関する調査研究のみならず、人材の育成や地域づくりの担い手の育成などの面で連携できると考えています。気候変動や資源の枯渇といった地球規模での環境問題の深刻化とともに、地域レベルでは少子高齢化や人口減少による限界集落の増加、遊休資源の増加、地域コミュニティーの崩壊など、地域が直面している課題は多岐にわたります。また、多様化・高度化する地域住民のニーズに対し、地域の特徴を活かした持続可能な地域づくりを進めていくためには、行政だけでなく、大学などの研究者や地域住民、事業者などの協力が不可欠であり、幅広いネットワークの形成が必要です。

学生の成長をサポートする名コンビ！ 助手とアシスタント

SUPPORTER 1　松元 悠（助手）

素直な思いを大切にしてほしい

地域実践領域がスタートした１年目から学生の隣で成長を見守ってきました。入学時は将来の目標が定まっていなかった学生たちが、農家さんのお手伝いをするサークルを立ち上げ地域の困りごとを解決したり、実家の燻製屋を継ぐことを決断したり、限界集落で一人暮らしを始め、その体験を卒業論文にまとめようとしているなど、今まさに地域が抱えている問題をリアルに体験し、自分たちが当事者になることで、地域社会で重要なポジションになろうとしているのを感じます。私の役割は学生たちが直感的に感じたことを具現化するお手伝いをすること。背伸びしようとせず、自分の素直な思いを大切にしてほしいので、「やりたいこと」＋「やれること」を明確にしていくプロセスを一緒に考えています。

「学生たちは地域社会の問題に対して覚悟をもって取り組んでいるので成長が楽しみです」

美術家。リトグラフという版画技法を用いてマス・メディアが報じる情報と現地の実見から出来事の再構成を試みる作品制作を行う。

SUPPORTER 2　山田真実（アシスタント）

自分の足で見つけたものは豊さがある

2020 年から１・２年生の授業や地域実践領域のブログを担当しています。領域名を聞いた時は町おこしを想像したので、地域のコミュニケーションの場づくりやイベントづくりを学ぶのがメインだと思っていたのですが、実際はもっと深いところまで地域に入り込み、自分たちで地域の魅力を見つけ、さまざまなカタチでアウトプットすることに驚きました。私の役割は学生たちと一緒にフィールドワークへ出かけ、一緒に考え、地域のモノや素材を活かしたものづくりに関わっていくなかで、考え方や調べ方を繋げること。今はインターネットがあるので簡単に知識は調べられますが、自分が足を動かして身につけたものは様々な応用の仕方があり、地域の大きな問題を解決していく力になると感じています。

「地域実践領域は自分が感じたことを言語化して人とつながり合っていく授業があります」

木版画作家としても活動しています。長崎県南島原市で行われたアートレジデンスで制作した作品。

［芸術学部 芸術学科］

総合領域
イラストレーション領域
美術領域
情報デザイン領域
空間デザイン領域
地域実践領域

携帯・スマートフォンの方は
こちらのQRコードから
アクセスしてください。

［地域実践領域 制作メンバー］
デザイン：浅野豪［写真クラス卒業生］
写真：オカモト アユミ［写真クラス卒業生］
編集・取材：西川有紀［モーラ］
イラスト：すずきあい［niwa／印刷クラス卒業生］
テキスト：加藤賢治・石川亮［地域実践領域 教員］
印刷：大伸社
発行：成安造形大学 入学広報センター
発行日：2021年4月1日
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東 4-3-1
Tel: 077 574 2119　Fax: 077 574 2120
E-mail: nyushi@seian.ac.jp　URL: www.seian.ac.jp

本書からの無断転載を禁じます。
また掲載内容は、2021年3月現在のものであり、一部変更される場合があります。
なお、最新情報については本学Webサイトをご覧ください。

OPEN CAMPUS 2021

1st4/18［日］ 2nd6/6［日］ 3rd7/25［日］ 4th8/29［日］ 5th10/10［日］

［ACCESS］

京都から20分	JR湖西線普通	JRおごと温泉駅
大阪から46分	JR京都線新快速・JR湖西線普通	
神戸から65分	JR神戸線新快速・JR京都線新快速・JR湖西線普通	

駅前からは無料のスクールバスで約3分

【　　】

成安造形大学

地域実践領域で学びたくなるポイントをPICK UP

● ポイント1　芸大らしい魅力的なカリキュラム

地域で実践されているまちづくりをプロジェクト形式で実際に体験。フィールドワークや創造力を養う授業を通して、これからの社会に貢献できる技能や知識が身につくと考えています。また、芸大ならではの環境で刺激を受けながら、さまざまな分野の学生たちと楽しく学ぶことができます。

地域実践領域の活動をみることができる
領域運営サイトです

● ポイント2　安心して4年間を学べる学費

入学時に必要な費用や卒業までにかかる学費を他領域と比べて低く設定していますので、4年間安心して学べます。

	前期（入学手続時）	後期	年間計
入学金（入学時のみ）	200,000円	–	200,000円
授業料	450,000円	450,000円	900,000円
教育充実費	31,250円	31,250円	62,500円
その他諸経費（入学時）	41,660円	–	41,660円
合計	722,910円	481,250円	1,204,160円

● ポイント3　就職に強い充実したキャリアサポート

本学では少人数教育による、きめ細やかな個別指導を大切にしています。この領域は、これまでの学問領域の壁を超えた新しい教育と研究の場です。体験的な学びを重ね、様々な視点で地域の魅力を広く発信できる力を養うため、地域の活性化を目指す企業や各種団体などへの就職活動が有利になると考えています。

写真：「針江のんきぃふぁーむ」にて